

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370118

研究課題名(和文)万博に見る芸術の政治性 - 紀元2600年博の考察と国際比較を中心に

研究課題名(英文) Political Nature in EXPO-Investigation and international comarision of Grand International Exposition of Japan, 1940

研究代表者

暮沢 剛巳 (KURESAWA, Takemi)

東京工科大学・デザイン学部・教授

研究者番号：80591007

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：日中戦争の戦局悪化に伴い中止されてしまったこともあり、紀元2600年日本万国博覧会をテーマとする研究はほとんど存在しなかった。本研究では、万博準備期間中に刊行された多くの記録を調べる一方、同時期に開催が計画されながらやはり実現の機会を逸したドイツおよびイタリアの万博計画と対比し、さらには同時期に国内や植民地で開催された各種博覧会について調べることで、この万博の全体像を浮かび上がらせることを目標とした。3年間を通じて、研究代表者と研究分担者は数度にわたり国内外の調査を実施し、また連携研究者と研究協力者の助力を得て、万博の開催計画をある程度解明することに成功した。

研究成果の概要(英文)：Few studies have been based on the Grand international Exposition of Japan, 1940(2600 Japan international exposition) because its significance was not realized due to the worsening of the Second Sino-Japanese War. In this study, we will examine numerous records published during the preparations for the expo. Furthermore, we aim to express the entire image of this unrealized expo by comparing it with the plans for expos that were to be held in Germany and Italy at the same time but were also not realized due to the war. We also mention various other expos that were held in different colonies during the same period. Across three years, the principal investigator and the co-investigator successfully conducted several domestic and international surveys and succeeded in elucidating the plan of the expo to some extent with help from the co-investigator and research collaborator.

研究分野：芸術諸学

キーワード：万国博覧会

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者である暮沢と研究分担者である江藤は、2011年度～2013年度の3年間、基盤(C)「大阪万博における前衛芸術考察と国際比較」に取り組んだが、その過程で、1940年に開催が計画されながら実現の機会を逸した紀元2600年日本万国博覧会(以下紀元2600年万博)の存在を知り、さらにはこの万博が大阪万博に対して様々な観点から強い影響を及ぼしていることを痛感した。実現しなかったこともあり、紀元2600年万博については未解明の部分が少なく、研究の余地が多々残されている。そのことにも魅力とやりがいを感じた両者は、次回にはこの紀元2600年万博をテーマとした共同研究に取り組むことで意見の一致を見た。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、大阪万博研究の時と同様に、紀元2600年万博の全体像を浮かび上がらせることにあった。そのため、開催計画について可能な限り多くの資料を収集することを目指した。また前回の大阪万博研究と同様、国際比較を重視したため、同時期に開催が計画されながらやはり実現しなかったベルリン万博(1950)とローマ万博(1942)も研究の対象とすることにした。この比較研究に当たっては、調査対象の広さや使用言語の観点から考えても2人だけでは不十分であったため、フランスの万博研究を専門とする寺本敬子を連携研究者として、またイタリアのファシズム芸術研究を専門とする鯖江秀樹を研究協力者として迎えることによって、研究体制の拡充を図ることとした。加えて、研究が進展するにつれて、紀元2600年万博が同時期に国内や植民地で開催された各種の博覧会とも強く関連していることが明らかになってきたため、新たにこれらの博覧会も調査の対象とすることとし、労力の及ぶ範囲で現地調査や資料の収集・読解を進めることにした。

3. 研究の方法

(1) 現地調査 現地調査は大きく国内と国外に分けられる。国内では、万博の会場予定地であった月島地区を訪れ開催計画と対照し、また万博に取り入れられる予定だった建国神話のモチーフを検討すべく、神話の故地である宮崎を訪れた。一方海外では、ローマ万博の会場予定地や2015年のミラノ万博、またベルリン万博に関しては、ベルリンのほかに万博の類推を可能とする資料のあるパリやニュルンベルク、さらに紀元2600年万博とも関連する様々な実験が展開された旧満州国の各都市(大連、長春〔奉天〕ハルビン)などが対象であった。研究期間の3年間を通じて、暮沢と江藤は基本的には合同でこれらの国内外の調査に当たったが、互いの所属機関のスケジュールが異なり調整がつか

かないこともあったため、その場合には各々単独で調査に当たった。また連携研究者の寺本には初年度に、1937年のパリ万博の開催計画を調査してもらうために現地出張を依頼し、一方研究協力者の鯖江には2年目にローマ及びミラノでの現地調査に同行することを依頼した。

(2) 資料収集 紀元2600年万博は開催されなかったため、開催後の記録は一切存在しない。そのため一次資料に相当するのは、開催計画について書かれた書面や、博覧会協会が出版していた広報誌などであるが、これらの資料は開催予定地であった月島のある中央区の図書館や資料館の閉架書庫に所蔵されている。そのため従来であればこれらの施設に足を運び、所定の手続きを経て閲覧する必要があったのだが、両者とも所属機関の業務が多忙なため、なかなかそのための時間を捻出できずにいた。ところが、幸運なことに、これらの資料の大半は、2015年から2016年にかけて国書刊行会より出版された『近代日本博覧会資料集成 紀元2600年日本万国博覧会』に採録されることが明らかになった。そのため、暮沢と江藤はこの資料集成を購入して研究の中心に据え、不足している情報を他の二次資料によって補う方針によって研究を進めることとした。また、海外の万博や植民地の博覧会については、多くの外国語文献を合わせて参照することとした。とりわけ、ドイツとイタリアの万博に関しては、同じく実現しなかったため、計画についての資料を数多く参照し、万博の概要についての理解を目指した。多くの資料を参照したのは、連携研究者の寺本と研究協力者の鯖江も同様である。

4. 研究成果

前回の大阪万博研究に引き続き、本研究の成果もまた、青弓社の厚意によって、同社のホームページに不定期に論文を連載するという形で発表された。連載のタイトルは「幻の万博」といい、現時点までに計7本の論文が発表され、また2本の論文が発表を控えている。各論文のテーマの概要は以下の通り。「はじめに」=21世紀の現在、紀元2600年万博について研究する意義について、歴史学や都市研究の観点から説明した。第1章=1940年に開催予定だった紀元2600年万博の開催計画の概要、また同年に開催が予定されていたものの、やはり実現の機会を逸した東京オリンピックと対比して、この二つの行事がともに奉祝にとって重要な意義を持っていることを明らかにした。第2章=万博の開催計画の概要について資料を交えて紹介し、施設建築のコンペがどのような観点から審査されたかを明らかにし、肇国記念館と美術館の展示計画について同時期の奉祝美術展などから類推し、また日名子実三の「八紘一宇の塔」を例にとり、奉祝の象徴性について論じた。第3章=現地調査と文献記録に基づいて、

1937年パリ万博におけるドイツ館の出展計画について論じた。調査の結果、ドイツ館の展示が当時のナチス政権の意向を強く反映していたことが判明した。第4章＝現地調査と文献記録、さらには2015年のミラノ万博の現地調査からの類推に基づいて、1942年ローマ万博の開催計画概要について論じた。調査の結果、開催予定地だったローマ近郊のEURの会場区画が、そのまま住宅開発に転用されていることが判明した。第5章＝現地調査と文献記録に基づいて、1937年パリ万博日本館の展示について論じた。調査の結果、美術品や工芸品などの出品計画が、紀元2600年万博の展示計画にも影響を与えていることが判明した。第6章＝同時期の国内や植民地で開催された博覧会と紀元2600年万博の関係について論じた。調査の結果、台湾、朝鮮などの植民地で開催された博覧会が、先進技術のショーウィンドーとなっていたほか、日本からの投資や観光客の誘致にも重要な役割を担っていたことが判明した。第7章＝満州国における各種の都市計画や実験と紀元2600年万博の関係などのテーマについて論じた。現地調査の結果、満州国の開発は満州鉄道(満鉄)を主体に展開され、特に首都に定められた新京(長春)の都市計画は、世界に類を見ない独自のものであり、その計画案が紀元2600年万博にも影響を与えたことが判明した。以上の各論文で論じた内容は、いずれも従来の万博研究ではあまり研究されてこなかったものである。本研究では、研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者がそれぞれ自分の研究課題をもって現地調査と文献調査に臨み、今まであまり研究されてこなかったテーマに取り組み、上記のような一定の成果を上げたものと自負している。この連載には、暮沢と江藤の他に寺本と鯖江も参加しており、それぞれ自分の専門的な見地からの研究成果を発表した。この紀元2600年万博研究は他の万博研究者からも注目を集め、2015年5月には、日本国際文化研究センターにて開催された国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」では暮沢、江藤、鯖江の3人が招かれ、暮沢が紀元2600年万博の開催計画概要について、江藤が1937年パリ万博におけるドイツ館の出展計画について、鯖江が実現されずに終わった1942年ローマ万博の開催計画について、それぞれ研究発表を行う機会を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9件)うち2本は掲載予定

寺本敬子 幻の万博 第5章 1937年パリ万博における日本館の展示とその背景(仮題、予定) 査読無

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi09.html> (2017、掲載予定)

江藤光紀 幻の万博 第6章、戦前の消費社会と幻の万博 後篇(予定) 査読無

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi08.html> (2017、掲載予定)

江藤光紀 幻の万博 第6章、戦前の消費社会と幻の万博 前篇、査読無、2017

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi07.html>

暮沢剛巳 幻の万博、第7章、満州で考える 人口国家・満州国の実験に探る紀元2600年万博の痕跡、査読無、2017

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi08.html>

暮沢剛巳 幻の万博、第2章、肇国記念館と美術館 紀元2600年万博の展示計画、査読無、2016

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi03.html>

鯖江秀樹 幻の万博、第4章、ローマ万博の「夢」 展示空間のなかの経験、査読無、2016

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi05.html>

暮沢剛巳 幻の万博、第1章、幻の紀元2600年万博 開催計画の概要とその背景、査読無、2016

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi02.html>

江藤光紀 幻の万博、第3章、パリに出現したナチのショーウィンドー 1937年パリ万博へのドイツ出展、査読無、2016

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi04.html>

暮沢剛巳 幻の万博、はじめに、幻の紀元2600年記念万国博覧会、査読無、2015

DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rennsai/maboroshi01.html>

[学会発表](計 3件)

暮沢剛巳 万博における芸術の政治性 紀元2600年万博の考察と国際比較を中心に、国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」、2015年5月18日、日本国際文化研究センター(京都府京都市)

江藤光紀 1937年パリ万博ドイツ出展内容とその背景、国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」、2015年5月18日、日本国際文化研究センター(京都府京都市)

鯖江秀樹 ローマ万博 展示空間に関する考察、国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」、2015年5月18日、日本国際文化研究センター(京都府京都市)

〔その他〕
ホームページ等
DOI:<http://www.seikyusha.co.jp/wp/rensai/maboroshi>

6．研究組織

(1)研究代表者

暮沢 剛巳 (KURESAWA, Takemi)
東京工科大学・デザイン学部・教授
研究者番号：80591007

(2)研究分担者

江藤 光紀 (ETO, Mitsunori)
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：10348051

(3)連携研究者

寺本 敬子 (TERAMOTO, Noriko)
跡見学園女子大学・文学部・助教
研究者番号：80636879

(4)研究協力者

鯖江 秀樹 (SABAE, Hideki)
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号 30793624